

『ホームドアから離れてください』

北川樹 著 幻冬舎 本体 1,400 円 + 税

忘れてしまった「懐かしさ」がよみがえる

会員 坂 仁根 (70 期)



せちがらい世の中で毎日電話やメールに追われ依頼人につき回され書面の締切りばかり気にしていると、世の中も仕事も自分自身も本当にいやになってしまう。だからといって、明るい将来に希望を馳せるほど若くはない。どうせこんなドタバタまみれで人生終わってしまうだろうという諦観を友に、仕事が終わった後に行く立ち飲み屋だけを楽しみに生きている私にとって、久々に本物の「希望」に会った気がした。読後に不快感ばかりが残る「いやミス」（嫌な後味のミステリー）ばやりの中、一服の清涼剤のような小説である。

横浜の中学校に進学したダイスケは、入った柔道部でコウキと知り合う。二人は「初心者コンビ」として、経験者である同輩からの冷たい視線や先輩のいびりに耐えながら、「強くなりたい」と励まし合って練習に打ち込んだ。しかし、強豪の一年生の台頭とともに部内の力関係が変化し、陰湿な「かわいがり」の対象となった二人は孤立感を深めていく。二月のある日、コウキはマンションのベランダから飛び降り、そしてダイスケは不登校になった。

引きこもりになって半年後、ダイスケは新聞で新宿御苑にある「空色ポスト」の存在を知る。投函できるのは「写真」だけ。写真を投函すると、同じように投函した別の誰かの撮った写真が届く。誰の写真が誰に届くのか、投函した者には分からない。ただただ、届く。そして、ただただ、届けられる。父のカメラで写真を撮り始めたダイスケは、やはり空色ポストへ投函しに来た制服姿の高校生ミキと出会う。ダイス

ケを「少年」と呼ぶミキとの淡い恋。しかし、ミキも突然姿を消してしまう。

三年後、ダイスケの元に手紙が届く。投函された写真から選りすぐった「空色ポスト写真展」の招待状だった…。

写真に関係する「空色ポスト」を主題にしているだけあって、相当にビジュアルな小説である。新海誠監督の映画「言の葉の庭」でも舞台になった新宿御苑の描写がみずみずしい。横浜の景色も通奏低音のように登場する。辛さに耐え切れず、ダイスケとコウキが部活動を一度だけさぼったときに訪れた中華街、山下公園、三日月形のインターコンチネンタルホテル裏の臨港パーク。ダイスケが再生の願いとともに訪れる港北ニュータウンの大観覧車、ミキと最後に会った丘の上に東屋のある公園（横浜市営地下鉄北山田駅近くの公園と思われる）、部活動の帰り道に毎日コウキと語り合った歩道橋。理不尽から逃れたくても逃れられない絶望を抱えながら、それでも必死に生きようとする十代の三人が、たまらなく愛おしくなる。題名「ホームドアから離れてください」のアナウンスの意味が解き明かされる終盤には、あの頃の苦さ、辛さ、孤独感、どうしようもないやり切れなさがこみ上げてくる。戻りたくはないが、それでいてひたすら懐かしい、ざらついた日々。

早稲田大学文学部在学中の著者による「衝撃のデビュー作」だそうだ。ちなみに、旧式で円筒形の「空色ポスト」というものが本当に新宿御苑にあるのか調べてみたが、実在はしない（らしい）。